



刹那も同時に構えた。

「命知らずですね…。今ここで殺されたいですか…？」

「命知らずは…、貴様だ!!!」

真名の声を皮切りに、戦闘は開始された。

悪魔が二人にめがけて、炎の塊を打ち放す。

皮膚や服に掠めて、ジュウッと溶けていっても、二人は気にも留めなかった。

ほぼ全て避けたと言っても良いだろう。

「なかなか…やりますね…。」

そんな悪魔の言葉を無視し、真名は銃弾を打ち込む。

避けられはしたが、何発かは掠めていた。

少し余裕のある悪魔の顔。

その顔を見た真名は、にやりと晒う。

「相手は…私だけではないことを…わすれたのか？」

「…!!?なにっ…！」

悪魔は咄嗟に背後を見た。

刹那が後ろで夕凧を構えていた。

「「神鳴流奥義…、百烈桜花斬!!」」

刹那の攻撃により、悪魔は避けたものの、片腕は吹き飛んでいった。

「やはり…神鳴流は、天敵ですね…。」

悪魔が悔しそうに呟く。

かなりの時が流れていた。

お互いぼろぼろの身であった。

しかし攻勢を緩めない。

真名の肩にも限界が迫っていた。

しかし、『楓の仇を討つ』

『あの「美しい紅葉の景色」を汚さない』

という目的が、今の真名の原動力になっている。

真名は、最後の勝負に出た。

それを刹那が察する。

そして、刹那は真名に言葉を投げた。

「龍宮...、そういえば、報酬の事言ってなかったよな。」

「？あぁ、そうだったな...」

「報酬は...あの、楓を傷つけた悪魔の、命だ！」

「ふん、望むところだ!!!」

真名はそのまま、『最後の勝負』に挑んだ。

つづく >> [最後](#)

名前:

コメント:

投稿